

一神教の起源 旧約聖書の「神」はどこからきたのか。
山我哲雄 (筑摩選書 2013)

- 029 一神教の諸相
(1) 拝一神教 monolatry: 必ずしも他の神々の存在を否定せず、むしろその存在を前提にする
が、特定の一神だけを排他的な崇拝対象とし、他の神々を崇拝しないあり方。
(2) 単一神教 henotheism: 機会ごとにある神が選ばれてあたかも他に代わるもののない一神
であるかのように崇拝されるあり方。
(3) 包括的一神教 inclusive monotheism: 多数の神々はある特定の神の現れ方であると説く。
(4) 排他的的一神教 exclusive monotheism: 狭義の一神教、特定の一神を唯一絶対の神と見な
す。
- 032 三位一体、神名論、顕現や天使などの精神的存在は一神教と多神教とが連続スペクトルをな
すことを示している。
- 035 一神教は砂漠で生まれたわけではない(バビロンのほitori)。アテン革命とは時代差がありす
ぎる(800年)。そもそも初期イスラエルの一神教は、拝一神教タイプのものだったらしい。
- 049 イスラエルという民族は、主としてカナン内地内部での社会変動の結果として生じたのであ
り、一団として外部から移住してきたという伝承の歴史性自体は疑問視されている。
- 071 申命記史書にほとんど歴史的信憑性はなく単なるイデオロギー文書である。
- 081 何が「イスラエル」を統合させたのか
(1) 共通の祖先の系図の制作
086 (2) 歴史の共有: 出エジプトなどの神話の共有
089 (3) 特異な習慣を通じた外部との差異化: ペリシテ人は豚好きであった。割礼: なぜそのよう
なことが行われるようになったのかよくわかっていない。
091 しかし、この二つが、世界中に離散し放浪しながら、2000年以上にもわたって民族としての
アイデンティティを維持しえたという、世界史上類例のない「奇跡」の秘訣でもある。
(4) ヤハウェという共通の神の崇拝。
098 しかしイスラエルで当初はヤハウェが知られていなかった可能性は高い。
- 100 神名は古い時代には祭儀において高らかに唱えられていたらしい。しかし、みだりに神名を
唱えてはならないとする習慣が2000年以上も続いたため神名の元来の発音はユダヤ人自身
にもわからなくなった。ギリシア語文書の表記より元来の発音はほぼ Yahweh と復元されて
いる。
「エホバ」の語は YHWH に不明であった母音をその読み替えである「アドナイ」の母音 a,o,a
を無理矢理当てはめた結果に由来し(ヘブライ語の音韻規則上最初の母音「ア」は Y 音のあ
とではみじかい「エ」に変わる)現在では一般に用いられない。
- 101 ヤハウェという語はヘブライ語からはうまく説明できずおそらくヘブライ語起源ではない。

- 110 人名の分析からヤハウエは古い時代には知られておらず、出エジプト関連かカナン定着前後の時期にヤハウエという神への信仰がイスラエルに導入され、王国成立前後に急速に普及し、王国確立期以降は圧倒的な勢いになったと示唆される。
- 116 それ以前にはエルという神が信仰されていたことが人名から推測される。
- 121 ヤハウエは元々パレスチナ南方の嵐の神であり¹、特定の集団に結びついてそれを守護する神だったが、それがやがてイスラエルの民族神、国家神となったと考えられる。これに対しエルは(ウガリトの神話では)世界の創造神であった。エルと習合し同一視されることによりヤハウエはやがて創造神としての属性を身につけ、普遍的な意味と性格を持った神と観念されていくことになったと思われる。
- 136 シナイ山がどこかは不明である。今のシナイ山に比定されるようになったのはキリスト教時代の紀元後4世紀以降に過ぎない。
- 144 前1200年前後にはパレスチナの中央山岳地帯を中心に「イスラエル」という集団が形成されていた(メルエンブタハ碑文)。その共属意識は上に挙げた(1)-(4)であり、主神はエルであった。そのうち前1000年頃に王国組織に移行したと思われる。
- 147 いずれの王国でもヤハウエ宗教と王権が密接に結び合ったことは確かなことと思われる。
- 151 ダビデ王朝に対するヤハウエの加護への信念は、後に、ダビデの子孫から救い主が生まれることを期待するメシア待望の源泉となった。
- 158 民族ごとに異なる神がいるという観念はエステル記、ルツ記に見られる。
- 164 初期のイスラエルでは、他の民族がそれぞれの神を持つこと自体はむしろ当然視されていたが、イスラエル人がそれらの他の民族の神々を崇拝することは厳しく禁じられていた。だからこそ「拝一神教」なのである。
- 166 聖書自体でも神々の存在自体は否定されておらず、むしろ前提とされている。十戒の中の嫉妬深い神という表現はまさにこれである(p289)。
- 168 古代イスラエル人は他の民族にも神があるようにわれわれにはヤハウエがいると単に考えていただけでなく、その他の神への優越性、無比性を信じていた。
- 172 カナンのエルを至上神とするパンテオンのイメージがヤハウエ宗教にもとりいれられ包括的一神教の方向を示すと解釈できる。
- 182 ヤハウエを自分たちの唯一の神としながらもその周囲に複数の何らかの超自然的・神的存在がいるのをごく自然と受け止めていたと考えられる。たとえば柱状女性土偶やヤハウエの救いを媒介する「アシェラ」という存在など。
- 187 ウガリトで発見されたフェニキア神話によれば、アシェラは最高神エルの妻で「神々の母」と呼ばれる大女神であった。
- 197 しかしながらカナンの地には強力なライバルがいた。バアルである。
- 216 バアル信仰を許容し振興したオムリ朝へのイエフ朝創始者によるクーデターは預言者エリシャの指示ということで正当化されているが、このクーデターと「ヤハウエのみ運動」の反撃とが結合していたのであろう。

- 239 イザヤの宣教には普遍的な神観が示されている。アッシリアは世界神ヤハウェが動かす道具に過ぎない。アッシリアの神々についてはなんら言及されていない。
- 240 アッシリアにおいては世界帝国として国家のインターナショナルな性格と世界神としてのアッシリアの神々の普遍性が対応している (サルゴン 2 世の碑)。
- 241 ホセアやイザヤなどの預言者たちは、小国にすぎないイスラエルやユダにあって、そのようなアッシリア的世界神、普遍的な威力を持つ神のイメージを逆転させてヤハウェにあてはめていったのではないか。
- 244 神観上の預言者たちの思想の意義はアッシリアの世界神的な神概念に刺激を受けつつイスラエルとヤハウェの民族的絆を一旦断ち切り、ヤハウェを世界の支配者として構想したことにある。
- 245 アッシリアの覇権のもとユダ王国を 55 年間支配したマナセ王 (王下 21-1) はアッシリアの完全な傀儡でありこの時代エルサレムでは「ヤハウェのみ」礼拝の理念とは正反対の、宗教混雑的状态が現出していたようである。
- しかしその後アッシリアは急速に没落しマナセの孫ヨシア王の治世第 18 年に「律法の書」が発見されたとされ「ヤハウェのみ」信仰の大規模な宗教改革をおこなった。その柱は
- 250 (i) 地方祭壇をすべて廃止しヤハウェの祭儀をエルサレム神殿に集中・限定する祭儀集中、Einheit
(ii) あらゆる異教的要素の排除と神殿の粛清、Reinheit
申命記にはこの二つが明記されている (p255)。
- 252 たぶんこれはアッシリアからのユダ王国の政治的独立を象徴的に示す政治的意味をも持ったであろう。
- 266 申命記は形式的にも内容的にも条約文書としての性格を備えるが、それはもはやアッシリアの大王との契約文書ではなく神との契約文書である。神との契約ヤハウェとイスラエルの関係を根本的に規定するものとして一般化され神学的に体系的に理解されるようになったのは前 7 世紀の申命記からであるといえよう。その背景には古代オリエントの国家間の条約文化があった。かつてのアッシリアとの屈辱的な条約関係を、いまや自分たちの神ヤハウェとの排他的関係に転用しようという工夫があったと考えられる。
- 申命記の神は拝一神教的な神である。
- 291 申命記運動は全体としてヤハウェの排他的崇拝を強調するものであったが、前 8 世紀の文書預言者たちに比べるとはるかに民族神的な拝一神教の性格を色濃く保ったものであった。そこにはヤハウェが単なる「イスラエルの神」を超えた世界の神であるという展望はほとんど見られない。
- 292 しかしエジプトの侵入でヨシアは敗死しパトロンを失った申命記運動は急速に後退した。エレミヤやエゼキエルによればすさまじい勢いで異教が復活した。

¹ 「デボラの歌」によれば南から地震や嵐で自然を震撼させながらやってくる。

- 300 しかしエジプトの支配は長続きせず新バビロニアのネブカドネザルに敗れた。この支配に反抗しようとして前 529 年偉に第一次捕囚を招いた。どの時代エレミヤはネブカドネザルはヤハウェの意志を実現する僕でありそれに服することを説いた。ここに前 8 世紀の預言者の普遍的神観が継承・発展された。しかしエルサレムでは主戦論が勝ち前 586 年にエルサレムは陥落しダビデ王朝は断絶し神殿は徹底敵意破壊されて第二次捕囚が始まった。
- 314 申命記の神観は契約定式による。エレミヤのこの「新しい契約」の予言がイエスによって成就されたと解したので新約聖書なのである。
- 申命記はヨシヤの治世以前から書き始められていた。申命記運動の綱領文書であったがその後バビロン捕囚はヤハウェ信仰への信頼を揺るがす危機であった。そこで申命基礎のものにも手を加えこのような危機的事態に対処しようとした。
- 330 ヤハウェの側が契約を守り通すためには律法遵守とヤハウェへの絶対服従という条件があったことを強調し、責任はもっぱらイスラエル側にあることを示すことにしたのである。
- 334 すべての喪失を「罪と罰」の図式で説明し意味づける作業は「自虐史観」にもみえるが、これは Webder のいう「苦難の神議論」に他ならない。
- 338 申命記には唯一神教的な記述が見られるが、それはすべて捕囚後の付加部分に見られる、大文脈からは比較的容易に除くことができる。
- 340 イザヤ書の未来予言部分は第 2 第 3 イザヤとよばれる後の匿名の預言者たちの言葉を集めたものであることが論証されている。
- 350 第二イザヤの偶像崇拜批判の多さと厳しさはバビロン捕囚中の偶像崇拜の誘惑の大きさを示す。
- 354 ヤハウェの優越性を従来のようにいってもごまめの歯ぎしりにしか聞こえなかったであろう。第 2 イザヤはパラダイムを転換し、神は実はヤハウェだけであり原理的に無比であるという思想を打ち出した。
- 355 第二イザヤにおける唯一神教は、神の存在についての形而上学的至便によるものというよりも説得のためのレトリックとして現れたのである。「唯一神観は宗教の新しい段階というよりも、レトリックの新しい段階をなしているのである。」(M S Smith)。
- 361 一連の革命によって一神教は成立した。
- (1) イスラエル結束のための民族的拝一神教としての排他的ヤハウェ崇拜。(海の民の時代)
 - (2) アッシリアを神の道具としてみる考え方(世界神としてのヤハウェ)
 - (3) 申命記運動
 - (4) バビロン捕囚の「罪と罰」的な神学的解釈
 - (5) 第二イザヤによる唯一神観の宣言。